『景徳伝燈録抄註』について

椎　名　宏　雄

一

宋初の景徳元年（一〇〇四）、道原によつて上進され、敕定入蔵を果した『景徳伝燈録』三十巻は、元来、達摩系の系譜に基ずく禅者の機縁や語句を集録する燈史という性格をもつため、教義や綱要を旨とする禅籍に比較して、その末疏が作られることはきわめて少なかつた。それは、文献的に一種の史書とみなされ、しかも敕定入蔵という栄誉と権威とを担う『伝燈録』以降の燈史に共通する宿命であるが、そのために、今日における禅録の文献的研究の立ち遅れの要因となつていることもまた事実である。

『伝燈録』の文献研究は、禅録研究の基礎的作業として、今日ようやく注視せられつつある。特に、宋版や敦煌文献の検討は急務であるが、現状はそれらを見ることすら容易でない。しかるに、筆者がこのほど見る機会を得た本邦中世の撰述『景徳伝燈録抄註』なる写本は、『伝燈録』の書誌的方面と、多くの引用文献の点で、きわめて価値ある珍籍と認められるので、とりあえずここにその概要を報告しておきたい。

二

本書は、それぞれ所蔵を異にする端本二冊である。うち一冊は、『新纂禅籍目録』に所載されながら従来未紹介の文献で、鎌倉松ヶ岡文庫に所蔵され、『景徳伝燈録抄註』なる表題を有し、『伝燈録』の序文および巻一より巻三の末尾に至る部分に対する〃抄註〃である。他の一冊は、茨城県水戸市郊外の新義真言宗の名刹、六地蔵寺の蔵書中より筆者が見出したもので、同じく『伝燈録』本文巻十より巻十三の部分までの〃抄註〃である。六地蔵寺本は尾欠で表題・識語共に存せず、筆蹟も松ヶ岡本とは全く異なり、かつ、より古い写本で、表紙・裏表紙の裏紙は五山版の摺経を使用している。しかし、内容を詳査すると、松ヶ岡本とは元来同一原本に基づく異本の各一部であることが知られる。

いま、両書の主要な点を対照しておこう。

	松ヶ岡本	六地蔵寺本
表題	景徳伝燈録抄註	ナシ
紙数	一四三紙	四二紙（尾欠）
大きさ	二六・八×一九・一センチ	二三・二×一五・三センチ
字数	本文抄文　八行一七字 註記　細字割註	全文のべ書き、 一五行二八字
筆蹟	室町末期～江戸初期、二手	室町初期頃、一手
本文箇所	『伝燈録』序文、 巻一、過去七仏章より 巻三、五祖弘忍章まで	巻十、長沙景岑章より 巻十三、汝州善明章まで

両本共、撰者・筆者・年記等に関する記載は存しないが、邦人特有の筆蹟と、註記に返り点が存すること、「大宋」「唐土」等の語法の存在、中国の制度に関する詳細な解説の散見、等の諸点から、本書は日本僧による撰述と断定してよい。

両本の伝承経路については、松ヶ岡本は第一丁表と末尾とに「成林寺什物」と「成林禅寺」の朱印が押され、裏表紙裏には森江書店のラベルを附す。しかし、成林寺は目下のところ不詳である。一方、六地蔵寺本には印記もなく、おそらく同寺第三代の恵範上人（一四六一～一五三七 or 八）のコレクション[1]中の遺産で、共に伝承を明らかにすることはできない。

本書は元来、『伝燈録』三十巻すべての註として存在したのであろうか。この点、本書はすでに一度註記した語句に対しては「在前○巻」と記載して重複を避けていることから推して、少なくとも、序文から巻十三までは確実に〃抄註〃の存在が認められる。また、本書の註は、祖師の別による粗密の度が甚だしい。全く註記の存せぬ祖師も多い反面、巻十三の風穴延沼の項は、註記のみ実に十二紙を費すがごとくで、明らかにある意図をもつ〃抄註〃なることを示している。

一体、『伝燈録』の巻十三は南岳系の最後を収め、巻十四からは青原下に移る。ゆえに、あるいは本書は巻首から南岳系の最後までの〃抄註〃であつたのかも知れぬ。とすれば、現存する二冊は、奇しくもその最初と最後ということになる。そして、六地蔵寺本の方が紙質・筆蹟共に古く、のべ書きである点で、原型に近い写本と考えられる。

三

本書の註記の特色は、撰者自身の語は極く稀で、大半は内容的に、(1)『伝燈録』本文語句の異本や燈史類による校合、(2)語句の典拠・出典を明らかにすること、(3)「山云」「源云」などの特定人からの引文、等が挙げられる。

まず第一に、異本等による対校は、『伝燈録』本文の全体

に対してではなく、重要な点で相違する語句のみを特に対象としている。対校に使われる主要な文献は、『宝林伝』・『宋高僧伝』・『天聖広燈録』・『伝法正宗記』・『林間録』・『禅林僧宝伝』・『聯燈会要』・『五燈会元』その他で、史伝・燈史関係の文献を網羅しているといつてよい。

注目されるのは、『伝燈録』の異本による校合で、対校に使われる種類には、新本・旧本・浙本・璧本・異本・一本・別本・或本等の名がみられる。いま、それらの内容を詳査すると、新本は元の延祐三年（一三一六）刊本に依つている大正大蔵経所収本に一致するから、延祐本を新本と称していることが知られる。これに対して、旧本の名はすでに延祐本の割註にもみられ、また、浙本も『四部叢刊』所収の宋槧本、常熟瞿氏鉄琴銅劍楼蔵本がすでに校訂に用いている[3]から、共に宋版であろう。璧本は不明であり、また、異本以下は厳密な区別の呼称ではないらしい。これらの宋版が、今日みられる宋槧『四部叢刊』本や常州本のいずれに該当するかの点についてもわずかに明確を欠き、にわかに決し難い。ただ、本書は前記延祐本を新本と称して底本となし、それを宋版等の数本の異本で対校し、また註記することから、本書の原作年代は一三一六年を下る間もないころ、すなわち鎌倉末期から南北朝初めにかけての成立と思われ、当時、多くの『伝燈録』の異本が日本に存在したことを教えている。

近代以前における『伝燈録』の書誌的業績は、われわれは『禅籍目録』によつて、わずかに江戸の碩徳たる無著道忠（一六五三～一七四四）の『景徳伝燈録校解』一冊の存在を知るのみであるが、本書はこれに先立つこと四百年も古い。ただ遺憾なことに、校合の方法にやや厳密さを欠くこと、校合の結果に対する勘弁の語がみられぬことを指摘できる。しかし、当時かかる大部の燈史に煩瑣な校合を試みたことは一驚に価いし、『伝燈録』の書誌学上、貴重な資料となるのみならず、日本禅宗の学門史上にも特筆されるべきであろう。

四

註記の第二の特徴は、本文語句の典拠として縦横に引く多彩の引用文献である。すなわち、各種の仏典・禅籍はもとより、老荘儒墨・史書・地書・天文・辞事典に至る内外古今の典籍に及び、前掲二冊のみでもその数一五〇種を超える。就中、『五燈会元』（一二五二）、『仏祖統紀』（一二六九）が時代的に最下限で、あたかも前述の本書成立年代を傍証している。

引用文献中、最も注目すべきは『宝林伝』と『六祖壇経』の引文である。前者は、当然ながら松ヶ岡本のみにみられるが、その多くの引文中、『宝林伝』の本文が逸して伝わらぬ巻七般若多羅章と、巻九からの引文が特に注目を引く。いま、巻七の引文によつて、菩提達摩の所伝中で新たに明瞭と

なつた事項を挙げれば、(1)般若多羅より与えられた、東土へ仏教を伝えることを予言する八つの讖偈、(2)仏大先と共に般若多羅の許で二甘露門と号されたこと、(3)インドの六宗破斥、(4)時の国王、異見王の排仏を教化して帰服せしめること、等の記事は決して『伝燈録』の創作ではなく、すでに『宝林伝』巻七に存していたことが判明した。反面、本書の過去七仏章には『宝林伝』からの引文がみられず、同書にその項が存在しないことを示唆する点で重要である。

また、巻九道信章からの引文は、わずかに三つの短文に過ぎないが、珍らしいのでその全文を掲げる。（句読傍点筆者）

(1) 宝林伝、之至於吉州遇賊曹武衛等、囲城経七十余日。大師乃誘導曰、須念摩訶般若波羅蜜。武衛等遙見城頭、有数千神人各長一丈、自穿金甲云云。

(2) 宝林伝云、破頭山、至貞観中方改為双峯山。

(3) 唐第三主高宗高帝永徽辛亥二年也。（以上、撰者の註）宝林伝、当高宗永徽三年庚戌之歳云云。

文中、(1)の曹武衛の名は従来未見であり、(2)の引文は、宋代姚寛撰の『西渓叢語』巻上所引の『宝林伝』道信章の語句に一致する。[3] かかる佚文からの引用は、本書の撰者が『宝林伝』全巻を閲していることを示唆し、本邦における同書の将来と伝播の上に興味ある資料となろう。

次に、『六祖壇経』の引文は、五祖弘忍章のみに存し、(1)慧能が悟道の偈を書いて弘忍から授法せられる段　(2)大庾嶺にて慧明が慧能から衣鉢を奪わんとする一段　(3)その他、の三ヵ所であるが、その引文は、現存『壇経』中の、いわゆる大乗寺本の該当箇所にのみ完全に一致する。

知る通り、大乗寺本『壇経』は「道元書」という奥書をもつが、実は永平寺第三代義价（一二四九～一三〇九）による宋槧本からの謄写であろうと論証せられている。[4] ゆえに、本書の撰者は、大乗寺に秘蔵せられた右書を見たか、または、大乗寺本の原本たる政和六年（一一一六）刊本からの引用かのいずれかであろう。しかるに、前掲(2)の部分の引文には、大乗寺本の影印との照合の結果の判明であるが、本文第十四折右の第一行第八字目から次の行の第六字までの二十六字を完全に脱している。しかし、大乗寺本の該当部分は、右の二十六字中の十一字が補筆加入される箇所で特に人目を引き、引文の際に脱字をすることは到底考えられない。ゆえに、本書はおそらく政和本からの直接引用ではないかと思われ、『壇経』の書誌の上でも看過しえぬ資料となるものである。

そのほか、本書の引用文献には、問題の書『仏法大明録』をはじめ、『径山広宗派序』・『円相集』・『羅浮山記』等の珍籍が存し、鎌倉末より南北朝における将来文献の研究にも益するものと思われる。

ところで、『伝燈録』の渉典に関して問題となるのは、『禅

籍目録』に所載の椿庭海寿撰『景徳伝燈録鈔』五巻二冊の存在である。筆者は、右書については駒沢大学図書館蔵本以外の所在を知らぬが、駒大本は刊本で五巻、乾坤二冊、尾欠で序跋・刊記等も存せず、おそらく江戸時代初期ごろの刊行と思われる。内容は、『伝燈録』中の語句の典拠を示すいわゆる渉典一色である。しかし、その渉典語句の数は、目録によればわずかに四八七項で、『伝燈録』に所伝を有する約一千名の祖師のうち、一語でも渉典がなされる者にして二一七名に過ぎず、まさに『伝燈録』の鈔出渉典といってよい。

ところで、右書も撰者は明記されぬ。一体、『禅籍目録』がこれを竺仙梵僊に嗣いだ椿庭海寿（一三一八～一四〇一）の撰とするのは何に依拠したのであろうか。思うに、『日本禅林撰述目録』中に「伝燈録抄　椿庭海寿」とみえるから、あるいはこれに依つて駒大本の『鈔』を椿庭の撰としたのではなかろうか。しかし、「抄」と「鈔」とは明らかに別で、これのみでは『鈔』の撰者は決せられない。なお、この『鈔』と本書の渉典を比較するに、何らの直接関係は見出しえない。また、二一七名の祖師の撰択と、伝燈録の節録たる『伝燈玉英集』（一〇三四）との関係もまた何も指摘できない。

五

本書の註記の第三の問題点は、「山云」「源云」等とある引文の存在である。前者は本書二冊で三百ヵ所を超え、後者は六地蔵寺本のみに十数ヵ所を数える。かかる引文の多くが『伝燈録』本文の解釈・説明である中で、特に中国の地理や風土社会等、社会経済方面のそれに対するものが顕著なことは特に注意を要する。一方、著語的な引文も存し、当然ながら六地蔵寺本の部分に著しい。たとえば、『伝燈録』巻十二の仰山東塔和尚章の「落纜不采功」なる語句に対して、

山云、解纜之後不論功。又云、放下艫棹了。又云、船中事采収也。源曰、船落纜不収功、維舟。

とあるが如きである。これらは、前述のごとき、いわば無味乾操的な校合や渉典に比較し、『伝燈録』を語録として読む上で、大きな助けとなることというまでもない。

しからば一体、この「山」や「源」なる人は誰か。この点、「山」については本書中、『伝燈録』巻十二の池州魯祖山教和上章の語句に対する引文ただ一箇所は「一山云」とみえ「山」が「一山」の略称なることを示唆する。とすれば、一山とは、鎌倉末期に来朝して日本禅林に多大の影響を与えた一山一寧（一二四七～一三一七）以外には考えられぬ。いま、『日本禅林撰述目録』には「五燈会元抄　一山説」なる記載が存し、[6]『伝燈録』の講説・述説をなし、また前記中国の諸般事情に通暁した人として、まさにふさわしい。

右の推定が許されるならば、本書の撰者は一山一寧より多

大の学的影響を受けた者でなければならない。と同事に、『伝燈録』の異本を数本も左右に置き、珍籍『宝林伝』や宋槧『六祖壇経』の閲覧を可能とし、古今内外の漢籍仏典に通暁した臨済系の碩徳に限定する時、われわれは、雪村友梅（一二九〇～一三四六）や虎関師練（一二八七～一三四六）の名に思い当る。もちろん、この両者に本書の撰述を述べる文献は見当らぬ。ただ虎関は、嘉元三年（一三〇五）東福寺蔵山順空の侍職となつた二十八歳の時、蔵山の勧めで少年幼学者のために『伝燈録』を講じたといわれる[7]から、その末疏が存在しても不思議はない。しかし、前掲の『仏法大明録』からの引文のごときは、同書を極端なまでに排斥した[8]虎関にしてはありえぬことである。かくして、目下のところ本書の撰者に擬しうる人はにわかに決し難いが、いまは全文の公開を他日に期しつつ、本書の概説にとどめ、先学の御教授を仰ぎたい。

1　平泉澄『江都督納言願文集』附録「発刊の由来」、阿部隆一「六地蔵寺法宝蔵典籍について」（『斯道文庫論集』第五輯）参照。
2　鈴木哲雄「景徳伝灯録の割注について」（『宗学研究』第十三号）参照。
3　『学津討原』清嘉慶元年刊本、第十二集所収。
4　大久保道舟『修訂増補道元禅師伝の研究』五四二～八頁。
5・6　日仏全、一、三三〇頁上。
7　『海蔵和尚紀念録』（『続群書類従』九、四六三頁下）。
8　福島俊翁『虎関』二九九～三二二頁参照。

寄稿されなかった諸氏の発表題目（五）

道元禅師と如浄禅師—その戒律的立場—　青龍　宗二
遺教考　関　稔
江戸初期の排仏論　高神　信也
入楞伽註如来心荘厳のゴートラ論　高崎　直道
密教と外教との関係—とくに所作タントラについて—　高田　仁覚
釈尊の無我説について　田上　太秀
異部派教義考　宅見　春雄
凝然にみられる天台教判　武　覚超
「三帖和讃」の「左訓」と「反」について　竹内　淳有
伝教大師の真俗一貫思想について　武田　賢寿
初期禅宗における観心と本覚思想　武田　忠
五重玄義について　多田　孝正
九州地方における妙心寺派の伝播について　橘　恭堂
円頓章の別行と末疏　館　克亮
マックス・ウェーバーのインド古代仏教論　田中　収

（三二八頁につづく）